直方市教育大綱「未来を拓く」

教育委員会だより

直方の教育

＜問い合わせ＞学校教育課　TEL 25-2323

学校のデジタル化が進みます

学校教育課

日本の国内外を問わず、世の中のあらゆるものがデジタル化され、今後、その傾向は加速すると予想されています。文部科学省は、学習の基盤となる資質・能力としての「情報活用能力の育成」の重要性を示しています。

そこで本市は、児童生徒が今後の社会に対応できるよう環境整備（デジタル化）を進めています。その取組は、大きく次の3点です。

① 統合型校務支援システムの導入
　↓ 各小中学校内および市内の学校間において教育データを相互に利活用する。

② 学校とご家庭の連絡手段のデジタル化
　↓ 導入しているアプリを活用しスマートフォン等で欠席連絡および学校からの文書をデータ送信

③ 電子黒板の普通教室への全室設置

①・③については、今後の導入に向けて取り組んでいるところです。

②については、現在、全小中学校の保護者の方々に案内し、すでに取り組まれています。

※②のイメージ図

これまで

●時間に制約がある
●つながらない時がある
●何度もかけなおすと保護者に負担

これから

○時間や場所の制約がない
○オンタイムで届く
○教員の子どもに向き合う時間が増える

これら3つの取組により、児童生徒の学力向上はもちろん、保護者の負担軽減・教職員の働き方改革に好影響がでると期待されます。

子育て支援センターが移転しました

こども育成課

子育て支援センターは令和5年4月に、新しくリノベーションされた古町商店街の「多世代交流スペースここっちゃ」内に移転しました。

子育て支援センターが入居している施設の中には、一時託児施設「おひさま」や、飲食・物販の交流エリアがあり、幅広い年代の方々が利用できるようになっています。

また、子育て支援センターのあそびのひろばでは、おもちゃを使って遊んだり、交流をしたりしながら親子で自由に過ごすことができます。

子育て支援センターは子育て中の親子を応援する施設です。「子どもとずっと家にいて、どうやって遊んでいいかわからない」「引越ししたばかりで、知り合いがいない」「子どものことを話したり相談したりする相手がいない」など来所の理由は様々ですが、子どもを通してお母さん同士顔見知りになることで、友だちの輪が広がっています。

これからも、商店街でも新たなつながりをつくりながら、地域の方々と子育て中の親子の架け橋となる場を提供していきたいと思います。

図書館の取り組み

直方市立図書館館長　野口 和夫

コロナ禍の図書館

新型コロナウイルス感染症の影響で、小中学校が休校になり、図書館を含む多くの文化施設が休館を余儀なくされました。飲食店やさまざまな業種の店舗が休業してゆく中、無論それ自体はやむを得ぬ判断でした。

そんなときに、図書館はその存在意義を考えながら、利用者の皆さんに何をどのように提供していくのか、それが課題でした。

休館中ですから、館内でゆっくりくつろいで頂く「滞在型の図書館」という理念は、一時的に下ろさなくてはなりません。それでは何ができるか？

館内に入って頂けないならば、とロビーにテーブルを並べて貸し出しを行うことにしました。直接選ぶことができないのは、かなりストレスであったようですが、その不自由さの中多くの方に利用して頂きました。

図書館では、以前から小学校の図書室に市立図書館のための棚を貸して頂いて、そこに本を並べて児童の皆さんに本に親しんでもらう機会を少しでも増やそう、という取り組みを続けてきました。コロナで学校は休校していましたが、学童クラブは運営されていましたので、学童クラブに図書館の本を持っていくことにしました。本当なら、そこで一冊くらい読んであげたいところですが、本を詰めたコンテナだけ置いて帰りました。

そのうちに、制限はつけながらも開館できるようなりました。当初は、貸し出し返却のみ、館内での閲覧はご遠慮願いました。それでも自分の手に取って選べることに感謝され、恐縮しました。その時点では、学習コーナーもビデオの視聴コーナーも閉鎖、もちろんお話し会も再開されてはいません。利用者の方には、入り口での記名、手指の消毒、マスク着用のお願い、距離の確保など、多くの不自由をお掛けしました。

図書館の職員も、返却本の殺菌、館内テーブル等の消毒、館内の定期的な換気など今までは行っていなかった作業を行っていました。

図書館の存在意義が問われた時期でした。

図書館・これから

何度かの波を経て、社会全体のコロナウイルスとの距離感が定まっていくなかで、図書館サービスも以前の日常を取り戻してきました。利用者の皆さんに不自由をお掛けした様々な制限を解除して、ゆっくりと滞在して、学び、発見し、くつろぐ図書館を目指していきます。

新型コロナウイルス感染症による図書館サービスの制限などは、もちろんない方がよかったのです。でも、その時期を通じて、図書館として気づかされたこともありました。

制限の中、図書館に足を運んで手に取って本を選ぶ人がいる一方、図書館が閉館していても全く困らない人もいる、そもそも閉まっていることを知らない人もいた訳です。

図書館は、老若男女全ての方の学習意欲に応え、憩いと安らぎを提供する場であり、そして出会いと発見の空間である、と信じその目標に向かって日々の運営をしています。

新型コロナウイルス感染症に社会全体が覆われてしまったこの三年間は、図書館の理想にブレーキが掛けられてしまったのと同時に、その理想の有りようが試されていた期間だったのだと思います。

図書館は、全ての市民のための施設だという原点に立ち返って、前に進みたいと思います。